

ケアマネの出会った 家族たち

～ 家族理解と家族支援 ～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

介護保険制度とケアマネージャーに

求められる役割

日本で介護保険制度が開始し、早10年が経過しました。介護保険制度の要と言われ、介護を必要とする高齢者と、そのニーズに対応するサービスを調整していく、ケアマネージャーという資格名もようやく世間に浸透しつつある昨今です。とは言っても、まだまだ、「ケアマネージャーって何をしてくれる人なの。」という疑問を持っている人も少なくありません。ケアマネージャーの役割が世間に浸透するには時間を要するようです。

しかし、超高齢社会の日本。年々、要介護高齢者や、介護保険サービスの利用者も増し、その制度は財政面で大きな問題を抱えています。国は、少しでも介護給付費を抑制するために、要介護化の歯止めを狙います。そして、今後続く超高齢社会を見据え、国がケアマネージャー（以下ケアマネ）に求めているのは、適切なアセスメントに基づく適切なサービスの調整。そして、介護予防です。

一方、介護保険サービスを利用する高齢者や、その家族は介護保険制度に何を望んでいるのでしょうか。

少しでも、自分らしく暮らしたい、と願うのは高齢者本人だけでなく、高齢者を取り巻く家族自身も同じ思いです。

親の介護は子供がするものだ、という時代を生き抜いて、当然に親を自宅で介護し、看取りを行っていた高齢者にすれば、自分だって、年をとり体が弱っても最後まで自宅で暮らしたい。病院になんて入院しないで自宅で死にたい、という願いを持っている人は少なくありません。

では、高齢者を支える家族、つまり子世代は親の介護をどのように捉えているのでしょうか。その捉え方は実に様々です。個人の考え方だけではなく、社会の状況に大きく影響され、事情があることも多いのです。介護を担う家族の気持ちがどうであろうと、親の介護をするのは当然という考えの中で、介護をしている家族。できるだけ自宅で介護をしていきたい気持ちはあっても、共働きなど時間的都合により自宅介護が困難な家族。また、介護はするが、在宅看取りはできない、いざという時には病院に入院させたい、という家族や、傍からみれば、自宅介護は大変だろうな、と感じる状況であっても、サービスの利用も消極的で、あくまでも家族の中だけで介護をしていこうという家族。反対に、介護は大変そうに見えなくても、長年の関係性における確執から在宅介護の限界が早々に訪れる家族。本当に、介護を

担う子世代の考え方や、選択しなければならない状況は多種多様です。

そこで話しは少し戻りますが、今、高齢者や家族が望んでいる介護保険制度、ケアマネの役割は何でしょうか。それは、自分たちの思い描く人生脚本の完成のための援助、つまり、自己実現に向けての援助を求めているのではないのでしょうか。と、すると、「介護の必要性」のみに着目しニーズに対応するサービスを結び付け援助するケアマネジメントだけでは、高齢者や家族の求める自己実現に向けての援助には一致しないかもしれません。

誰もが、質の高い介護を受けたいと願っているのではなく、例え介護が必要な状態になったとしても、自分で考え、決定する。自分らしい人生を歩むことへの援助を期待しているのでしょうか。そして、できることなら、人に頼らなくても、自分でなんとかしたい、と思う気持ちも人の心の中には備わっているのだらうと思います。

ケアマネには、介護保険制度という枠組みの中で出会った援助対象者と対象者をとりまく環境を含めて、援助を展開するソーシャルワークが求められているのでしょうか。

ケアマネになるには、一定の基礎資格と経験年数という条件に基づいて受験資格が与えられ、その条件をクリアし試験に合格すれば（実務講習受講、都道府県への登録などが必要ですが）、ケアマネ業務はできます。それは、ソーシャルワークを展開していくためには少々、いやかなり大雑把な、資格者の養成という印象をめぐえません。ここに、ケアマネ資格のあり方や資質の向上を考える時に大きな疑問を感じますが、今そこをどうこう言っても即解決することにはなりません。

様々な課題を含みながらも、今、ケアマネ資格を持ち、その業務を展開する者として、援助対象者の役に立つ事ができるような実践力を身につけていくことが必要です。

私は、ケアマネとしての日々の業務実践の中で、具体的に役に立つ援助ができるようになるために、援助を「家族理解と家族支援」というキーワードを持って展開しています。

それは、立命館大大学院教授である、団士郎先生の家族療法ワークショップに参加したことが始まり

でした。今、目の前の援助対象が抱えている問題のすべては、家族という土台の上に成り立っている。問題（症状）は、社会や家族との関係性（環境性）の中で発揮され、個人に属する、原因と結果という直線的なことに解決を求めるよりも、家族のシステムに変化をもたらすことによって、事態は良循環へ向かいやすいということが納得できたからです。この、家族システムに対するアプローチについては、まだまだ私自身が学びの途中であります。学びながらにして、日々の業務を実践していく中で、家族が問題を抱えながらも元気になって、「今までよりは少しはマシ」という折り合いをつけながら、暮らし続けている事例にいくつも出会うのです。そして、そんな家族の物語を身近に感じることもできる、このケアマネという仕事が楽しくなっています。

問題を抱えながらも、元気になっていく家族の物語を紹介しながら、ケアマネとしての対人援助について考えていきたいと思います。

ケアマネの出会った家族たち ～自己決定、を支える。～

それは、春とは名ばかりの寒さの続く3月下旬のことでした。巖（いわお）さん（79歳）から、ケアマネに一本の電話が入りました。

「ちょっと、来てくれないか。これからの事を色々相談したいと思って。」と、耳の遠い巖さんが一方的に話、電話は切れました。

巖さんは、妻、カズさん（77歳）と、独身長男51歳との三人暮らしです。長男が仕事にでかけている日昼は、夫婦二人で支え合っただけの生活です。この2、3年持病の腰痛があり、外出や室内の歩行も苦痛が伴い、思うような動きができなくなっていました。時々、痛みが増すと専門医へ受診し入院することもありましたが、担当医の治療方針に従えず、医療機関とはトラブルになるような形で治療を中断し退院してくる、ということが多くありました。

巖さんは自宅の中では、これまで通り一家の大黒柱のような顔をしながら、動けなくなってきた体とは反対に、言葉数だけは増え、気に入らないと大声で怒鳴ることもありました。

傍で支えるカズさんは、幼いころから自家の手伝いをし、十分な教育に恵まれずに、文字を書いたり読んだりすることができません。けれども、それ以外のことはなんでもやりこなす働き者の妻です。自宅で食べる殆どの野菜は自分で作り、漬物など冬場に食べる保存食の準備も完璧です。こまかな家計の管理も行い、無駄のない質素な生活ぶりです。巖さんの、少しわがままな、大柄な態度にも上手に話を合わせながら、時には横を向いて舌を出しているあたりは、なかなかのユーモアがあります。カズさんは、巖さんを上手にあやしなながら、自身もしっかりとした芯のある女性です。

人に弱みを見せることのないカズさんが、ある時緊急入院することになりました。誰にも話すことのない、数年前からの不調が癌という形で、末期の症状になっていました。原発巣からの転移もあり、見通しは厳しい状況です。それでも、持前の気丈さで予定の治療が終了すると、自宅退院することができました。自宅に戻ったカズさんは、弱った体にも関わらず、これまで通りの巖さんとの生活を続けます。退院して半年が経過しました。寒さの続く北海道の冬の終わり、カズさんは風邪をこじらせ肺炎になり、再び入院することになったのです。

同居する長男は病気の母親の心配はしていましたが、母親を労わる気持ちの少ない父巖さんに対しては、不満もあります。また、加齢や少なからず病気の影響もあって、頑固さに話しの伝わり難さも手伝って、意思疎通が難しくなっている現実もあります。カズさんの不在の家の中では、男所帯が気持ちの上でも殺伐としています。

巖さんが自分の思うように事が進まないで「母さんが入院したから、こんなことになった。あんな役に立たない奴は死んでしまえばいい。」とさえ言葉が飛び出します。これには、さすがの長男も黙ってはられません。父親の発言をたしなめたところで、巖さんの身勝手な怒りは頂点に達します。

「口答えをするなら、お前が出て行け。」

長男も負けるわけにはいきません。

「ああ、出て行ってやるよ。」ついに我慢の限界でした。そして、どう考えても、誰かの手助けがなければ生活するには厳しい状況の巖さんを一人残し、長男は家を出て行きました。

巖さんには、長男の他に、54歳の長女と53歳の次女がいます。それぞれ、結婚はしていますが、近くに住んでいます。娘たちも、母親が入院した後は、何かと不便であろう父親を思って、忙しい合間を縫って様子を見に来ていましたが、その都度頑固親父の発言には閉口するものがあり、たしなめると怒鳴られ、「もう来るな」と吐き捨てられます。そんな経過から、今では娘たちの足さえ、巖さんのもとから遠のいているのです。

唯一の長男が家を出た事で、巖さんの生活状況は困難にぶつかりました。腰痛も悪化、自分で立ち上がってトイレに行くこともできず、室内は垂れ流しの状態と化していました。勿論、動けないのですから食事の支度に台所に立つこともできません。お腹だけは空きます。なんとか、電話に手を伸ばし知人に電話をかけSOSを発信です。電話を受け取った知人は、聴こえが悪くこちらのお話を聞きとれない受話器の向こう側が誰なのかを推測し、辿り着いたのが巖さんです。慌てて巖さんの元へ訪ねたところ、室内の散らかりようと、身動きをとれないで腰痛を訴えているその状態に驚いています。巖さんとの話の中で、ケアマネが関わっていることを知り、電話番号を押したのは知人でした。

電話を受け取ったケアマネは、状況はわからずとも、何かがあったことだけは予測可能です。まずは巖さんの家に向かいます。巖さんの家に訪問した時に目にしたこの光景は、同居しているはずの長男との何かを物語っていることはすぐに理解できました。

「息子さんは、どうしたの。」

「あいつは駄目だ。家を出て行った。」

「え。なぜ。じゃあ、娘たちは。」立て続けに質問です。

「あいつらも駄目だ。皆、言う事を聞かんのだから家に入りにさせないようにした。」巖さんは淡々と語ります。巖さんは、腰痛が悪化しており、体を起こすことができず、汚れた衣服のまま、寝そべて話を続けます。

「この状況で、生活に困ると思うけれど、息子さんにも娘さんにも助けてもらえないなら、これから、どうしますか。どうしたいですか。」ケアマネは、巖さんが自身の生活に対してどのような見通しを持っ

ているのか確認します。「今は、腰が痛くてかなわん。入院させてくれる病院に行きたい。」と入院を希望されます。入院するのであれば、先立つ受診が必要であり、息子や娘たちの少なからずの協力が必要であることを伝え、あらかじめ連絡先をきいていた息子へ連絡しますが、仕事でもあって息子には連絡がつかがりません。次に連絡したのは近所に住む次女です。次女は仕事でありながら連絡がつき、仕事が終わり次第父親の所へ向かうと言ってくれました。次女は仕事を終え父の所にやってきます。弟が家出をしたことは知らなかったと言います。慌てて、弟へ連絡すると「あんな親父は放っておけ。俺は何もしない。」と捨て台詞です。長女へ連絡しても「放っておくしかない。」と話し合いになりません。目の前の父親に対して兄弟が話し合いを持つこともできず、このまま置き去りにすることも忍びない状況に、次女の間からは涙が溢れ出ます。

ケアマネはまず、訴えのある腰痛に対して受診の協力を得られるのか確認しますが、「今まで、色々な病院に行っては、治療方針に納得できず、病院とトラブルを起こして退院してきている。もう、どこの病院に連れていけばよいかわからないし、自分が探した病院に連れて行っても、そこが気に入らなければ、後から文句を言われるから自分は関わりたくない。」と言います。

ケアマネは巖さんに、現在の状況では誰かのお世話にならなければ、生活を続けるのが難しい状況だから、病院でなくても介護保険の施設に一時的に入って、食事や入浴など安定した生活ができるようにしてみてもどうかと提案してみました。

「そんなところには行かん。入院させてくれる病院がないのなら、家にいる。誰にも手伝ってもらわなくても、一人でやってやる。」と強気な発言です。

次女は、涙ながらにケアマネに話し始めました。巖さんは、子供たちが幼い頃から、仕事はするが、競馬などにお金をかけ、十分なお金も家庭にいれず、母親と自分（次女）がいつも家計を管理しながら生活していた。長女は得意なスポーツで進学したため、学費もかかり、年子の次女は家事手伝いをしながら、定時制の高校進学を選択。母と二人で家事や家計をやりくりし学校に通い、ひとつ年上の姉が無事に高

校に通えるように協力していた。母は、父親に横柄な態度や暴言を吐かれ、十分なお金も持たされず苦労もしたが、「後ろむいて舌を出しても、我慢して負けないでやっていくよ。」といつも次女を励ましていたそうです。次女は、自分と母親だけがいつも苦労を重ね、姉や弟たちはあまり苦労を感じていなかったのではないかと話します。自由に好きなことに向かって進路を選べた一つ違いの姉と、家の心配もしないで進学できた弟に挟まれ、誰にも聴いてもらうことのなかった、15歳の時の次女の胸のうちが今、明かされます。

「姉や、弟はそうやって、構うな、放っておけ、というけれど、私には放っておくこと、それも苦しいです。自分の親なのに、他人に心配してもらっているのに・・・でも、今の父に良かれと思って手を貸しても、受け入れられないし、気に入らなければ怒鳴れる。父が一人の生活に根をあげて自分の口から助けてほしいと言わない限り、私は何もしません。だから、私も放っておきます。たぶん、父はなんとかなると思います。」次女は、次女なりに、父親を放っておく、手は貸さない、という決断をしました。

さて、対人援助の場面において、対象者の自己決定を支えることはとても重要です。けれども、支援の必要な人が支援を拒み、また支援の必要な状況の人に、支援をしないという選択は対象者の生活上のリスクが伴います。同時に支援を提供しない周囲の人への責任や、場合によっては非難の声があがることもあるでしょう。「敢えて何もしない」という選択、決定は他の選択以上の勇気と責任がいります。

巖さんのこの場面での本人の自己決定と娘の選択は、もしかすると「ネグレクト（養護の放棄）」というラベルが貼られる可能性を秘めています。

巖さんの「だれの世話にもならないで、一人でなんとかやっていく。」という決断と、次女の「父が根をあげるまでは、子供として何もしない。手は貸さない。」という選択について、ケアマネは双方にその選択に基づくリスクを説明しました。

まず、巖さんへ。このままでは、室内も汚れ放題、食事も不規則で健康を損ねる恐れがある。次女へは巖さんの生活が安全に送れるように、介護保険のサービス利用につながるよう働きかけはしていきま

す。そのやり取りに、ケアマネもたびたび訪問するので、平日は本人の安否を確認できるが、週末はケアマネが訪問することはできないので、その間に何かあったときには、次女をはじめ、子供たちが心にひっかかりを残さないでしょうか、と確認。次女は、「何かあっても仕方ない。なんとなく、外から様子はみにきます。」そんな言葉がありました。

ここで、本人、次女への自己決定に伴うリスクを確認できたので、「だれの世話にもならない。」という本人と、「あえて何もしない。」という次女の決定を支えることにしました。

とはいうものの、この決定はケアマネとしても、巖さんに万が一のことがあっては困るな、という心配や不安を抱えての支援になります。

その後の1週間は、巖さんの生活ぶりを心配したケアマネが週末を除き毎日訪問を続けました。訪問の都度、汚れた衣服の着替えを手伝い、簡単な室内の掃除をしました。食事は本人が自分で知っている商店へ電話で弁当を頼み配達してもらったものを食べています。

弁当を届けた商店の店員も、この状況で一人暮らしをしているらしい巖さんのことは心配です。毎日、約束の時間に弁当を届けますが、たまたま、寝坊をした巖さんが玄関からの呼びかけに応答がない時などは、何かあったのではないかととても心配になります。

訪問時に気になることがあれば、ケアマネに連絡をくれるように、商店の人とも連携をとります。

そんな中、なんとか生きていく、命に別条はないということは確認できています。この1週間の中で、誰かの手助けがなければ自分の生活は成り立たない、という自覚が巖さんにも出てきました。訪問の度に、身の回りのことに少しだけ手を貸していたケアマネがヘルパーと共に訪問し、巖さんに言葉をかけます。

「巖さん、私は毎日訪問することはできませんし、こうやって巖さんのお手伝いをする役割の人間ではないです。今後もこの状況が続けるわけにはいきません。でも、介護保険のサービスでは、お金はかかりますが、室内の掃除や洗濯、食事作りや、必要なら入浴のお手伝いもできますよ。ヘルパーさんに、お願いしてみますか。」ケアマネの言葉に、1週間前の強がりの巖さんは姿を消しています。

「そうだな、掃除と洗濯、風呂にも入りたいな。お願いするかな。」あっさりとした返答です。ケアマネは早速ヘルパーサービス導入の調整を行いました。

「温まると腰の痛みがラクになるから。」と自宅での入浴を切望していた巖さんでしたが、古い自宅の風呂が故障し、自宅での入浴は困難です。そこで、1年近くも中断していた、ディサービスへ「お風呂に入りに行こう。」と声をかけ、再びディサービスに通うことになりました。

ヘルパー、ディサービスの利用は開始されましたが、予定通りにサービスが実施されないことも度々あり、サービスに関わる担当者は、いつも巖さんについて多くの心配を持ちながら援助を展開しています。

巖さんが、子供たちの手を借りずの生活が続いています。訪問してくれるヘルパーとも信頼関係ができ、「誰かの手を借りること」に少しずつ慣れてきたようです。持病の腰痛も落ち着いています。今では、ゆっくり立って歩くこともできるようになりました。家を出て行った長男と巖さんとの同居生活は途絶えたままです。けれども、一人暮らしに寂しさなのか、長男に帰ってきてくれるように、巖さんは少しずつ頼み込んでいるようです。そんな父親の変化を受けて長男も時折様子を見に来ています。けれども、長男の顔を見ると相変わらず大柄な巖さんと長男の同居が再開されるのはまだ先のことのようです。

援助過程において「見守る。様子をみていく。」という援助方針は珍しくありません。見守る、様子を見る、という言葉は対象者の気持ちを優先し保護的な印象を含んでいます。援助の場面でこの言葉を使っても違和感を覚えることは少ないでしょう。けれども、見守るという名の、単なる援助過程の放置が実在することは、多くの援助者たちは薄々気がついているのではないのでしょうか。

巖さんと次女は、手を借りない、手を貸さない、といことを意識下で決定しました。リスクも覚悟です。でも、その決定をケアマネは公的サービスへとつなげました。悪化している家族の関係性と家族の歴史も考慮しながら、それぞれの位置関係に境界線を引いたうえで、残された本人の底力を支えました。

けれども、この決定を支えるためには、巖さん自身の一人暮らしに対する不安や自暴自棄になる場面を支え、近隣（商店）の人の心配や万が一に対する懸念も調整しなければなりません。また、課題として残っている、子供たちとの関係調整、サービス提供機関の不安など、巖さんを取り巻いて、関係する人たちには実に多くのストレスが発生しています。

「万が一の時には、誰がどうやって責任をとるのか。それが福祉の仕事か。」そんな声さえ聞こえてきそうです。

人の一生の中で、万が一のことが起こったとき、その事に対する責任を担える人はいるのでしょうか。とかく、責任の所在が問われる現代社会ですが、人生に起こる万が一に対して、責任が取れる人などいないのではないのでしょうか。多く問われている責任という言葉には、結果が起こるまでの経過の中で、十分に受け止められなかった気持ち（感情）が、その受け止めに求めて訴えられているのではないかと感じます。

経過の中で、一人ひとりの抱えている思いが吐き出され、考えられ、受け止められてさえいれば、結果がどうあれ、責任の追及に力が注がれることは少ないような気がします。

巖さんの事例を通して、人が人の中で生きていくということには、多くの面倒や、不安や、心配がついて回るのだなと思いました。暮らし易さや合理性が問われると、面倒を避け、人の気持ちが置き去りになってしまい、安全や責任ばかりが優先されます。でも、巖さんの周りに関わる人たちは、多くのストレスを抱えながらも、連携を取りながら巖さんや子供たちを支えているのは確かです。

やっかいなこと、不安や心配を持ちながらも支え合っている、そのことが、地域の力になって、互いに思いを向け合って生きていく力になっていくのではないのでしょうか。

巖さんの生活課題が解決されている訳ではありませんが、巖さんの周りでは、人のつながりができ、支える力もついてきているのは事実のようです。

プライバシー保護の為、事実を加工しています。

